大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桂, 小蘭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004374

故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」について

桂　　小　蘭

1．問題の提起

故事熟語「畫虎不成反類狗」（他人のまねをしようとしたが、うまくいかず、かえってまずい結果となる）は後漢の時から登場した言葉である。後漢、劉珍の『東観漢記』馬援傳に

（馬援）與兄子嚴、敦書曰:「学龍伯高不就猶為謹飭之士，所謂刻鵠不成尚類鶩者。效杜季良而不成陷為天下輕薄子，所謂畫虎不成反類狗也。」

とある。

後漢将軍の馬援が甥である馬嚴、馬敦への手紙の中で「龍伯高に見習うことができなくても、まだ慎ましい者になれる。いわばハクチョウに彫れなくてもまだアヒルに似ている。である。一方杜季良の真似ができなかったら軽薄な者になってしまう。いわば虎を画いて犬に似てしまうということである。」

同じ熟語は劉宋の范曄の『後漢書』馬援傳にも見られる。また後にこの成語から「畫虎不成反類犬[1]」「畫虎翻成犬[2]」「畫虎不成反倒類犬[3]」「畫虎類犬[4]」「畫虎類狗[5]」「畫虎成狗[6]」「畫虎不成[7]」「類犬[8]」などの新しい熟語も派生した。使用率の高い言葉であることが窺える。

しかしこの熟語における「狗」の原意に関しては、昔から様々な解釈が行われ、最近になってさらに新たな解釈も現れ、意見が分かれている。次にこれらの意見を紹介しておきたい。

1.1　この「狗」は犬の意ではなく，虎の子の意である。

この意見を代表したのは清の学者の恵棟である。恵氏が『後漢書補注』巻七の中で、

『漢律』曰:「捕虎一，購銭三千；其狗半之。」『爾雅』釋獸:「熊虎醜，其子狗也。」

と『漢律』と『爾雅』釋獸の条を引用して「畫虎不成反類狗」の「狗」を「虎の子」と解釈している。

二十世紀九十年代に入ってから、中国の学界では「狗」を「虎の子」と主張する論調が目立つようになった[9]。その影響のためか中国ネットの個人のブログにも似たような主張の文章が多くみられる。その論点を支える唯一の根拠として挙げられたのは、例外なく『爾雅』釋獸の「熊虎醜，其子狗」である。

1.2　この「狗」は犬の意である。

この意見を代表するのは清の蔣超伯と民国の王先謙である。蔣超伯は『南漘楛語』里語の条で、

> 「畫虎不成反類狗」「畫龍不成反類狗」皆漢時里語。惠氏補注於「畫虎類狗」下引『漢律』曰:「捕虎一，購錢三千，其狗半之;捕豺一，購錢百。」『爾雅』釋獸曰:「熊虎醜, 其子狗也。」意謂「畫虎類狗」之「狗」為虎子也。如是則孔僖傳「畫龍不成，句。」作何解乎？ 狗為賤畜, 所以鄰房生告**駙**、僖誹謗先帝。惠氏于伏波傳援引『漢律』，失之泥矣[10]。

と疑問を呈した。蔣超伯は『後漢書』孔僖傳に出ている「畫龍不成反**为**狗」を引き出し、「狗」を「虎子」と解釈すれば、「畫龍不成反**为**狗』の「狗」は解釈できなくなると反論している。

王先謙も『後漢書集解』の中で恵氏のこの解釈に対し、

> 此引俗諺，極不類者反以相形，非必指熊虎之子也。『玉篇』「熊虎子曰**貙**」與「狗」不同。
>
> （ここでは俗語が引用され、極めて似ていないもの同士が逆に対比されるわけであるから、この「狗」は必ずしも熊と虎の子を指すとは限らない。『玉篇』に「熊虎の子が**貙**という」とあり、「**貙**」と「狗」とは異なるものである。）

と指摘した。

1.3　この「狗」は「熊之子」である。

2005 年第 1 期『中国語文』に張茂華と孫良明の論文「關於漢語成語釋義和引証的規範問題——讀『現代漢語成語規範詞典』」が掲載され、次のようになっている。

> 虎犬形象差**别**甚大，畫虎不成也不能象犬；此「狗」非義同犬。『爾雅』釋獸:「熊，虎醜，其子狗；**絕**有力，**麤**。郭璞注：律曰：「捕虎一，購錢三千，其狗半之。」**這説**明，熊属虎類，狗是熊之子即小熊；故畫虎不成可能畫得像小熊。詞典畫虎類犬有書証，当解**为**「後誤作犬」；但不能將「畫虎不成反類狗」之「狗」看作同「犬[11]。」。

1.4　この「狗」は「佝着身子的小狗崽」である。

北京教育学院豊台分院の呉桐楨が2010年6月10日CCTVの「百家講壇」という教育番組で「畫虎不成反類狗」を取り上げ、この「狗」は成犬ではなく，生まれた直後の仔犬であると述べている[12]。その根拠として挙げられたのは『爾雅』釋獸「犬, 未成豪, 狗」である。呉桐楨の論は私の知る限り、まだ新しく、「一家之言」に止まっている。それについては後に反論する。

この「狗」に対する理解が分かれているためか、この成語から派生した類義語も二通りに分かれている。「畫虎不成反類其狗[13]」(虎を画くつもりだが、その子に似てしまった)における「狗」は、語法から見ると明らかに虎の子のことである。それに対し、前掲「畫虎不成反類犬」「畫虎翻成犬」「畫虎不成反倒類犬」「畫虎類犬」「類犬」の「犬」は明らかに犬のことである。既成の類似成語から見れば、「畫虎不成反類狗」の「狗」をそのまま「犬」と捉えるものは圧倒的に多く、明確に「狗」を「虎子」と断定するのは「畫虎不成反類其狗」の一つだけである。私の知る限り、それがみられるのは明清の小説くらいで、他の時代にはまだ見つかっていない。

なぜこの「狗」をめぐって解釈はこんなに違っているのか、これを説明するには、「狗」と「**豹**」、「狗」と「犬」との相違について触れておく必要がある。

2.「狗」と「豹」

「狗」は犬のほかに「虎子」の意もあらわす。一方「**豹**」は専ら「虎子」をあらわす専用の字として最も早く収録され、解釈されたのは、現存資料の中で唐の陸德明の『經典釋文』である。しかし「狗」と「**豹**」はどれが本字なのか，研究者のあいだでも意見が分かれている。

2.1 「**豹**」は「虎子」の本字である。

この意見を唱える字書・韻書は次のようなものがある。

①『經典釋文』

『經典釋文』爾雅音義に「狗, 古口反, 本或作**豹**。沈、施火候反, 注同[14]。」とある。「沈」は梁の音韻学者、沈旋のことであって、『集注爾雅』を著し、「施」は陳代の音韻学者、施乾のことであり、『爾雅施音[15]』を著している。陸德明と沈、施の注音は異なっているが、意味の解釈は三人同じである。

②　宋の丁度の『集韻』

『集韻』巻六の上聲に

豹，舉后切。熊虎子也。『漢律』「捕虎購錢三、其**豹**半之」是也。通作狗。

狗，舉后切。『説文』:「孔子曰：‘狗，叩也。叩氣吠，从守。’」

とみえる。

③　宋の司馬光の『類篇』

『類篇』巻九に

豹，舉后切，熊虎子也。『漢律』「捕虎購錢三，其**豹**半之」是也。又**许**候切[16]。

とあり、**豹**は二つの発音があると記されている。また同巻十に

狗，舉后切。『説文』:「孔子曰：‘狗，叩也。叩気吠以守。’」又許候切。熊虎子名[17]。

と記され、「犬」と「虎子」をあらわす時、「狗」の発音が若干違うことは字書で初めて言及された。

このように「**豹**」字は、現存の資料で最初に登場したのは『經典釋文』である。陸德明が、「熊虎醜，其子狗」の「狗」は本来「**豹**」とも書くと述べていることからみれば、彼も「**豹**」は「虎子」の意をあらわす本字であると考えたであろう。

『經典釋文』の完成時期については南朝の陳および唐の始との二説があるが、いずれにせよ陸德明の時代は後世より遥かに数多くの古書がまだ残っていたため、陸氏は何の史料を元に、「**豹**」は「狗」の本字と考えたのか明記していないが、各種の資料を総合したうえで出した結論であったと思われる。そして宋代の字書の多くもこの解釈を踏襲している。最も目を引くのは、『集韻』と『類篇』では『爾雅』の郭璞注に引かれる『漢律』「捕虎購錢三千, 其狗半之」の「狗」をいっそう「**豹**」と改めた点である。『漢律』は宋の時代すでに散逸し、『集韻』の著者は直接それをみることが不可能であるため、結局郭注から引用したものと考えられる[18]。しかしその「狗」を「**豹**」とあえて改めたのは、陸德明と同様「**豹**」を本字と考えただろう。王力ら現代の言語学者たちも『集韻』では「狗」は「**豹**」の異体字とみなされていると指摘した[19]。異体字とは古人のいう俗字のことである。

このように「**豹**」は「虎子」の意をあらわす本字であることは、陸によって最初に言及され、宋代にそれは定説となっていた。清代に入ってから訓詁学の繁盛につれて『爾雅』に対する研究も盛んになった。清の葉蕙心の『爾雅古注**斠**』に

蕙心案：『玉篇』「**豹**，熊虎之子也。」狗蓋**豹**之譌。『釋畜』云：「未成豪，狗。」郭注：「狗子未生**毳**毛者。」犬之子從犬，作狗，乃狗之正字。

とあり、「熊虎醜，其子狗」の「狗」は「**豹**」の誤りだと指摘した。

台湾教育部の『異體字字典』（電子版）でもこの「狗」は「**豹**」の異体字として扱われている。その理由について編集者の林炯陽は次のように述べている。

> 按,「狗」,『集韻・上聲・厚韻』舉后切，訓「狗犬」，與「**豹**」同音，而形符「豸」、「犭」形義皆近, 故借「狗」為「**豹**」; 又可能是俗書「豸」形或作「犭」形, 故「**豹**」改換形符作「狗」。據上所述,「狗」可收為「**豹**」之異體[20]。

実際部首「豸」の文字が「犭」の文字に書き換えられた例は珍しくはない。たとえば『經典釋文』に「**狁**, 或作**狁**。」とあり、『一切經音義』巻二十一、金剛髻珠菩薩修行分經に「**貓**貍，…或從犬作猫，俗字也。」とあり、また『廣韻』に「貍，俗作狸。」とある。清の畢沅の『經典文字辨正書』によれば「貘」は『史記』では「獏」となっているのに対し、『漢書』では「貘」となっている。さらに『偏類碑別字』豸部:「豹下引『唐李子如墓誌』作「犿[21]」など数多い。

2.2 「**豹**」は「虎子」の俗字であり、「狗」は「虎子」の正字である。

一方、逆説を唱える学者もいる。清の盧文弨は『經典釋文考證』で

> 案『説文』狗在犬部。豸部無**豹**字。『釋文』謂本或作**豹**。此俗字也。

と指摘した[22]。

その影響を受けたのか、前掲『經典文字辨正書』では、「狗」を正字とし，「**豹**」を俗字とみなしている。同時代の嚴元照も『爾雅匡名』で盧文弨の説を引用している[23]。さらに清の董瑞椿の『讀爾雅日記』にも詳細な記述がある。

> 案許書有狗，無**豹**。下『釋畜』「狗属。未成豪，狗。」郭注「狗子未生**毨**毛者」，是狗為犬之正字。狗从句聲。白虎通五行篇「句芒者，物之始生。」故造从犬从句之字，為犬字專義。猶駒从馬，句聲。而說文馬部訓為「馬二**歲**曰駒也。」引申之，斯凡物之子皆得曰狗。『釋鳥』:「**鴿**鴿，天狗。」郭注:「小鳥也。」又『釋畜』「牛屬，其子犢。」郭注:「今青州呼犢**为**「**狗**」，**丛**堪取證。「**狗**」非許書所有，亦當作狗。後人以言熊虎子，故改从豸旁；以言牛子，故改从牛旁耳。

董瑞椿は「狗」と「駒」は最初専ら仔犬と仔馬をあらわすために「句」の音と意を借りて作られた専用の字であるが、後に「狗」はすべての動物の子をさす総称にもなった。一方「**豹**」と「**狗**」は後に総称の「狗」から独立して作られた文字だと考えたのである。

さらに日本の一部の学者にも同じ傾向がみられる。明治十六年に刊行された長梅外編集の『古今異字叢』に

> 狗、イヌ。**豹**、**猂**、**貊**[24]。

とみえ、**豹**、**猂**、**貊**はすべて「狗」の異体字となっている。

「狗」は犬の意を指す正字でるのは間違いのないことである。しかしだからといって「狗」は「**豹**」と「**㹠**」の正字と断定するのもいささか問題があると思われる。盧と董は「**豹**」を「狗」の俗字ととらえた一つの理由は、『説文解字』に「狗」はあるのに対し「**豹**」はないからである。しかし『説文解字』には「狗」が収録されているものの、専ら「犬」の意としてしか解説されず、「虎子」の意については全然言及されていない。当然《爾雅》郭注のように漢律の引用もない。一方別の野獣の「**貀**」については『説文解字』巻九の豸部に

> **貀**，獸，無前足。从豸出聲。『漢律』：「能捕豺**貀**，購百錢。」

とあるように、漢律まで引用し「**貀**」の説明を行っている。また許慎と同時代の李巡も『爾雅注』で「熊虎之類、其子名狗[25]」と述べているのを併せてみれば、虎の捕獲に関する『漢律』の条文は、同じ漢代の許慎も見られる状況であったと推測される。なぜ許慎はその説明を避けたのかわからない。

なお「**豹**」のみならず、他の動物名、たとえば「貓」も先秦両漢の古典、たとえば『詩』大雅、『爾雅』釋獸、『禮記』郊特牲にしばしばみえるが、『説文解字』にはそれは収録されていない。一方同じ意味の「貍」は収録されている。また俗字ではあるが、逆に『説文解字』で取り上げられたケースも少なくはない。このため『説文解字』に収録されていないという理由だけでは、この説は成り立たないと思われる。

また同じ理由で董は「**㹠**」を「狗」の俗字と捉えているが、『文選』巻十二の郭璞『江賦』に「夔**牴**翹**踵**於夕陽，鴛雛弄翮乎山東。」とあり、李善の注に

> 『爾雅注』曰：「今青州呼犢為**牴**，**㹠**，夔牛之子也。**牴**與**㹠**同，火口切。」

と記されるように、**㹠**と**牴**とは同じ字で、いずれも仔牛のことを指す。

2.3 「狗」は「**豹**」の「轉注」である。

「轉注」については、学者によって定義は異なり、まだ定説がないのは現状である。清の朱駿聲がいう「轉注」は次のようなものである。

> 轉注者，體不改造，引義相受。…就本字本訓而因以輾轉引申為他訓者曰轉注；依形作字，覩（睹）其體而伸其義者，轉注也[26]。

朱の「轉注」論を簡単にまとめると、「轉注既是引申」になるのではなかろうか。そのため『説文通訓定聲』の目次で「狗」の右下に「**豹**」と併記し、さらに本文では『爾雅』「熊虎醜，其子狗」と『漢律』のそれを引いて「轉注」と記されている。すなわち朱は虎の子をあらす「狗」を「**豹**」の「引申」とみなし、「狗」のもつ「虎子」の意も「犬」から「引申」したものだということである[27]。

2.4 「狗」は「**夠**」の「假借」である。

朱駿聲の「轉注」に対し、王力は次のように反論している。

> 朱書對於轉注、假借、**别**義、聲訓之間的界限, 是**划**分得不**够**清楚的。主要**还**是「本字」的観念作怪。例如「狗」字**别**義欄引『爾雅・釋獸』:「熊虎醜, 其子狗」, 並説字亦作「**夠**」。這本来應該歸入假借一欄的, 只因『説文』没有「**夠**」字, 不好説「狗」是「**夠**」的假借, 就只能算作**别**義了[28]。

王力は『説文解字』に「**夠**」が収録されていないため、朱は「狗」は「**夠**」の「假借字」であるといえず, 無理に「轉注」に入れたと批判した。王力の批判から見れば、王力も「**夠**」は「虎子」の本字であると考えただろう。

2.5 「狗」・「**夠**」・「**駒**」・「**构**」はみな「句」の「假借字」である。

実際「狗」は「**夠**」の「假借」である前に, 自身も「假借」であった。清の末の尹桐楊が『爾雅義證』で「熊虎醜, 其子, 狗;**絕**有力, **麤**。」について次のように述べている。

> 凡獸小者曰句。馬作駒, 熊虎作**夠**, 各隨類加之。咸亦猶是也。此均借字[29]。

つまり「狗」「駒」「**夠**」はすべて借字である。「句」の音（gou）と意を借りてそれぞれの属性をあらわす「犭」、「馬」、「豸」をつけて作られた借字である。

「句」の意について清の徐孚吉が『爾雅詁』で次のように述べている。

> 按狗从句, 句者, 幼小之稱。『月令』:「句者畢出, 萌者盡達。」句萌皆初生之名。『釋鳥』:「**鴿**, 天狗。」郭注:「小鳥也, 江東呼為水狗。」『釋畜』:「牛屬, 其子犢。」郭注:「今江東[30]呼犢**为**狗。」狗屬, 未成豪狗。凡從句之字, 音義**俱**同。今俗猶名幼子為狗子。

段玉裁も『説文解字注』巻十、犬部で

> 狗, 按『釋獸』云「未成豪, 狗。」與馬二歳曰駒, 熊虎之子曰**夠**同義。皆謂稚也。

と解釈している。

前掲『南潤楛語』里語に

> 意謂畫虎類狗之「狗」為虎子也。如是則孔僖傳「畫龍不成, 句。」作何解乎？」

の「句」も「狗」の「本字」として用いられているわけである。

尹桐楊より早かった王筠の『説文句讀・第九』巻十八にも

> 『列子釋文』説白豹曰:『爾雅』「熊虎醜, 其子豹。豹, 熊虎之子也。」筠案:狗者, 借字;**夠**者, 後起之專字;豹者, 譌字, 不可謂熊虎之類, 其子皆謂之豹也[31]。

とみえる。王筠は「虎子」をあらわすものとして「狗」は借字であって、「**夠**」は後にできた専用な字であるといっている。王筠は「狗」はどの字の借字なのか明記していないが、おそらくは蔣超伯、尹桐楊らの考えと同じだろう。

借字すなわち「假借字」は人によってその定義が異なるが、許慎が『説文序』で述べたように「假借者，本無其字，依聲託事。」から始まったものと考えられる。清の孫詒讓は許慎の説をさらに具体的に説明しそれを一歩発展させた。

> 天下之事無窮，造字之初，苟無假借一例，則將逐事而為之字，而字有不可**胜**造之数，此必窮之数也，故依聲而托以事焉[32]。

だとすれば「狗」、「駒」、「**豹**」、「**㹠**」など小動物をあらわす名称は、当初すべて尹桐楊の指摘したように「句」の音と意を借りて作られた「假借字」と考えるべきだろう。「假借字」は古代漢語、特に先秦両漢の文献には多数みられる。

2.6 「狗」・「豹」・「駒」・「㹠」「羔」はみな同源字である。

『王力古漢語字典』によれば、「狗」、「**豹**」、「駒」、「**㹠**」、「羔」はすべて同源関係をもつ同源字である[33]。「同源字」について王力は『同源字典』で次のように述べている。

> 凡音義皆近，音近義同，或義近音同的字，叫做同源字。**这**些字都有同一来源。或者是同時産生的…；或者是先後產生的。…同源字，常常是以某一概念為中心，而以語音的細微差別（或同音），表示相近或相關的幾個概念。例如：
>
> 小犬為狗，小熊、小虎為**豹**，小馬為駒，小羊為羔[34]。

さらにこの四字の同源関係については、次のような記述がある。

> 「狗」、「駒」為侯部，「羔」為幽部，幽侯旁轉。「**豹**」、「**㹠**」與「狗」同 在『廣韻・厚韻』。「**㹠**」為曉母，其餘均為見母。見曉旁紐。

『王力古漢語字典』では新たに「**㹠**」も加わり、五つになっている。そのうち「狗」、「駒」、「**豹**」、「**㹠**」の四つの同源字はその上古時代の発音を現代中国語のピンインで表示すれば、その韻母はすべて「ou」である。「羔」の韻母「ao」と「ou」は上古時代その母音がきわめて似ているため，同じ韻部に入っている。一方その声母については、「h」の「**㹠**」を除けば、他の四つはすべて「g」である。「h」と「g」は同じ「舌根音」に属す。このように上述の五つの同源字は韻母にせよ声母にせよ、同じまたはきわめて近いものである。

上でも取り上げたが、部首「犭」は「犭」に書き換えられやすいこともあるためか、同源字「狗」、「**豹**」、「駒」、「**㹠**」そして「羔」のうち、「**豹**」の借字として使用されたのは、現存の文献から見れば、前述したように、「狗」は三回、「駒」と「羔」は一回ずつとなっている。

3　動物の鳴き声をあらわす「㹠」・「㹠」・「狗」

「**㹠**」について郝懿行の『爾雅義疏』に

郭云「今青州呼犢為**㹠**。」『釋文』:「**㹠**，火口反。」『字林』云:「牛鳴也。」然則**㹠**之言呴也，亦言狗也。牛之子名為**㹠**，亦猶熊虎之子名為狗矣。

とあるように、「**㹠**」は仔牛を指す名称のみならず、牛の鳴き声もあらわすことができる。だから「**㹠**」は、「呴」といい、また「狗」ともいう。熊や虎の子が「狗」と名付けられているように、牛の子も**㹠**と名付けられているわけである。

「呴」については、唐の慧琳の『一切經音義』巻九十六に

獸呴，呼垢反。廣疋云:「呴，鳴也。」顧野王云:「獸聲也。」賈逵「呼**呺**也」。『聲類[35]』:**嗥**也。『古今正字』作**㹠**，義同。亦作吽，從牛，句聲。『集[36]』作呴。通也[37]。

とみえる。すなわち「呴」は獣の鳴き声であり、「**㹠**」、「吽」に互いに通じるというわけである。

なお動物の鳴声をあらわす文字については『一切經音義』巻六十六に

哮吼:上（哮），孝交反。『埤蒼[38]』云:「“哮”，嚇，大怒也。」『古今正字』云:「豕驚聲也。從口，孝聲也。嚇，音赫。」下(吼)，訴狗反。『字書』正作吽，又作咆也。『論文』作吼，俗用字也。『考聲[39]』云:「牛虎鳴曰吼也。」『古今正字』云:「熊羆子呴，**嗥**也。」又「謂獸聲也。鳴也。**嗥**也。從口，孔聲也。**嗥**，音豪也。訴，音黑搆反[40]。

と記され，また巻二十七に

嗥吠，上，胡刀反。古文作**獟**。『說文』、『玉篇』「咆吠，犬鳴也。」『切韻』「熊羆虎聲也。」

と記されているように、「哮」、「吼」、「吽」、「咆」、「呴」そして「**嗥**」は、正字と俗字の区別があるものの、いずれも虎、牛　豕、犬または熊の子、羆の子など動物の鳴き声を指す文字で、発音も同じかきわめて近いのである。

さらに「狗」も最初は犬の吠え声をあらわす文字であると考えられる。これについて『説文解字』に

孔子曰:「狗，叩也。叩気吠以守。从犬，句聲。」

とみえる。

一方段玉裁の注に

「吠以」當作「以吠」。…叩氣者，出其氣也。　古厚切。四部[41]。

と解釈されている。

すなわち犬は気を叩きながら吠えることを通じて守るということである。だとすれば、「狗」も犬の吠え声と関連しているのではないか。

動物の鳴き声について『王力古漢語字典』にも詳細な記述がみえる。

> 「**豹**」與「呴」、「吼」古音相同,「呴」、「吼」在『廣韻』中有呼后切、呼漏切上、去兩聲。『說文』后部:「㖞,厚怒聲。」『段玉裁注』諸書用呴字,即此字也。『聲類』曰「'呴,**嗥**也。'俗作吼。」『玉篇』:「吼,牛鳴也。」「**豹**」與「㖞」、「吼」音義相通,實同一詞,「**豹**」只是為豬吼叫所造的專用字;『玉篇』是以特指義來釋「吼」。

すなわち「**豹**」は豚の鳴き声をあらわすために作られた専用の文字で、「呴」、「吼」とは発音は同じで、「呼后切」と「呼漏切」、「上聲」と「去聲」の二つがある。意も互いに通じ、いわゆる同源字である。

上述のことからみれば、遥か上古時代に小動物を含め、動物の鳴き声は**現**代中国語の拼音であらわすと、総じて「gǒu」か「hòu」とまとめることができるだろう。そのためか、これらの小動物をあらわす専用字,たとえば「狗」、「駒」、「**㹠**」、「**豹**」を作るとき、一律に発音的にも意味的にも近い「句」を右半分に、それぞれの部類に基づいて「犭」、「馬」、「牛」、「豸」の部首をつけた、いわゆる「形聲字」が誕生したわけである。これらの動物名称をあらわす専用字は発音が似ているうえ右半分もすべて「句」で統一されているため、しばしば相手の「假借字」として混用されている。たとえば『尸子』逸文の十六には:

> 虎豹之駒,未成文而有食牛之氣。

とある。ここの「駒」は明らかに「**豹**」の「假借字」である。 また『爾雅』釋獸「熊虎醜,其子狗」の「狗」、郭璞『爾雅注』「律曰'捕虎一,購錢三千、其狗半之'」の「狗」、李巡『爾雅注』「熊虎之類,其子名狗[42]」の「狗」は、すべて「**豹**」の「假借字」または「異体字」といえる。

なお字形は相似していなくても、発音が近ければ、「假借」することもある。前掲『爾雅義疏』に「 按今東齊、遼東人通呼熊虎之子**为**羔,羔即狗聲之轉。」とみえるように、清代の東齊[43]、遼東では「熊虎之子」が「羔」と呼ばれ、「羔」もまた「**豹**」の「假借字」である。

「假借字」の果たす役割について、孫詒讓はさらに次のように述べている。

> 視之不必是其本字,而言之則其聲也,聞之足以相**喻**,用之可以不尽;是假借者可以救造字之窮而通其變[44]。

つまり「假借字」は主にその字の発音を借りて類似の意味を表すもので、見る人は本字でなくてもわかる。また発音が同じであるため、聞く人も理解できる。「假借字」

のもつこうした役割こそ，これらの動物名称の相互混用を可能にしたのだろう。

４．「𤟤」・「狗」・「貊」の発音

「𤟤」の発音について、前述したように陸德明は古口反（gǒu）とし、沈旋と施乾は火候反（hòu）としている。『集韻』と『類篇』では舉后切（gǒu）と許候切（hòu）との二種類が併記されている。また『類篇』では「熊虎之子」をさす「狗」の発音は許候切（hòu）とされるのに対し、「犬」をさす「狗」の発音は舉后切（gǒu）とされている[45]。

ここで重要になってくるのは「貊」の存在である。「貊」は『爾雅』と『說文解字』には収録されていないが、『集韻』巻八去声に

貊・𤟤・狗，許候切。熊虎子名。或作𤟤、狗。

とみえ、「貊」の後ろに「𤟤」・「狗」も同時に併記され、熊虎の子の名称としてこの三字は発音も意味も同じで、互いに置き換えられるということである。この記述から重要なヒントを得られる。それは「𤟤」はみずから熊虎の子をさす本字にとどまらず、「貊」の借字としても使われていたのではなかろうか。このため「𤟤」は本字の舉后切（gǒu）と借字の許候切（hòu）との二種類の発音があるわけである。「狗」についても同じことがいえるだろう。つまり「狗」は『爾雅』と『漢律』では「𤟤」の異体字または借字として用いられている一方、後にまた「貊」の借字にもなっている。それゆえに「熊虎醜，其子狗」の「狗」について、陸德明の注音と沈旋、施乾のそれと異なり，陸は「𤟤」の古口反（gǒu）とし、沈旋と施乾は「貊」の火候反（hòu）としているのである。

ではなぜ熊虎の幼犬をあらわすには「𤟤」のほかに、「貊」もあるのか。それは地域の差、つまり方言と関係があるだろう。揚雄の『方言』巻八に「虎，陳、魏、宋、楚之間或謂之李父，江淮、南楚之間謂之李耳，或謂之於𤟤。自關東西或謂之伯都。」と記されるように、漢の頃すでに地域によって虎の言い方はさまざまである。

論外の話であるが、アメリカ人の漢語学者 Jerry Norman（中国名羅傑瑞）は、漢語の「犬」は漢語固有の言葉であるが、「狗」は古代の苗瑤語から伝わった外来語だといっている[46]。しかしそれについての具体的な考証もなく一種の仮説にすぎない。上述の先人たちの諸論から見れば、羅の仮説は成り立たないと思われる。一方同じアメリカ人の言語学者の Gordon Downer は苗瑤語の「狗」は漢語から借りたものだと主張している[47]。

5.「虎子」と「小虎」

実は漢魏の頃二音節の「虎子」、「小虎」は盛んに使われていた。前掲《東観漢記》巻十六の班超傳に「(班超) 酒酣激怒曰：'不探虎穴，不得虎子'」とあるが、これに似た熟語「不入虎穴，不得虎子」(『後漢書』班超傳)、「不探虎穴，安得虎子」(『三国志』吳書、呂蒙傳などもある 。

また「虎子」という原意のほかに、比喩の意も派生した。『三国志』呉志、淩統傳に

> 二子烈、封，年各歳數，權内養於宮，愛待与諸子同，賓客進見，呼示之曰：「此吾虎子也。」

とみえるように、孫権は武将の遺児を「虎子」とたとえ，賓客に紹介した。虎好きな孫権はまた二人の愛娘にもそれぞれ「大虎」、「小虎」と名付けた[48]。

漢代のさまざまなエピソードを集めている晋の葛洪『西京雑記』に「漢朝以玉為虎子，為便器，使侍中執之，行幸以従。」とみえるように、漢代の便器はしゃがんだ虎子の形に仕上げられたので、「虎子」はまた便器の代名詞にもなっていた。

以上のように「虎子」をはじめとする二音節の熟語は、漢、魏の頃その原意から「比喩」「借代」まで幅広く用いられたのである。

それに対し「虎子」の意をあらわす「狗」が登場する漢魏の文献は、『爾雅』およびその郭璞注に引用される『漢律』、そして李巡の『爾雅注』の三点しかない[49]。

『爾雅』は中国最古の訓詁学の専門書であるが、その完成時期については、西周、戦国時代の初期、戦国時代の末期、前漢の初期や前漢の中後期など五つの説があるが、このうち戦国時代の末期と前漢の初期の説は最も有力である[50]。『漢律』はそれぞれ前漢の初期と後漢の頃制定された法律であるが、基本的に『秦律』を踏襲するものだとされている[51]。『爾雅注』の著者の李巡は後漢末の宦官である[52]。『爾雅』と『漢律』の前身であった『秦律』との接点はまさしく戦国時代の末期にある。この点からみれば、「狗」を借りて「虎子」をあらわす現象は、漢代以降のものではなく、漢以前の現象であったと推測される。むしろ漢代、特に後漢に入ってから、「虎子」、「小虎」、「大虎」といった二音節熟語の頻繁使用によって「狗」の借用は少なくなり、昔から伝わってきた極少数の文献を除けば、「虎子」の意としてほとんど使用されなくなったのではないか。

単音節と二音節の語彙の変遷について現代言語学者の陸宗達、王寧は次のように述べている。

> 可以看出，上古動物的幼子很多稱「狗」。而馬之小者稱「駒」，羊之小者稱「羔」，「駒」、「羔」都是「狗」的音變。這些字古音都在「侯」韻。可見在漢語詞彙發展

的早期，詞彙的意義是綜合的，統稱很多，以後思維細密了，詞義趨向分析，分化出「犢」、「駒」、「羔」、「狗」等不同名稱。待双音節合成詞和詞組大量產生，改用詞的組合来区**別**同類事物，詞彙的發展又趨於綜合了[53]。

本字の「**豹**」についても似たような経緯をたどったと考えられる。借字または異体字「狗」の頻繁登場により逆に本字の「**豹**」の使用はめっきり減り、もっと早い時期から死語または死語同然になっていたのではなかろうか。そのため「**豹**」は『爾雅』および『説文解字》だけではなく、他の先秦両漢の文献からも姿を消したのである。

６.「犬」と「狗」

6.1「犬」は成犬であり、「狗」は仔犬である。

「犬」の定義については『爾雅』釋畜では触れていないが、『説文解字』では次のように解釈されている。

狗之有縣蹏者也。象形。孔子曰。視犬之字。如畫狗也。凡犬之屬从犬。苦泫切。

徐灝の『説文解字注**箋**』によると、「縣蹏」は着地しない一本の足指のことで、猟犬にしかない足指のことである[54]。猟犬はいうまでもなく成犬である。

一方「狗」については、『爾雅』釋畜に「犬，未成毫，狗。」とある。これについて郭璞は「狗子未生**毳**毛者。」と説明した。「**毳**毛」について郝懿行は「**毳**, 獸豪也。」と『説文解字』を引用する一方、『經典釋文』爾雅音義、釋畜も引用し、「**毳**，謂長毛也。」と記している[55]。すなわち「狗」は長毛がまだ生え出していない幼犬のことである。

幼犬をさす「狗」は周代の儀礼制度を記録する『儀禮』や儒家経典を解説する漢代の經傳に時に出てくる。『儀禮』既夕禮に「白狗**幦**。」とあるが、鄭玄は「未成豪，狗。」と解説を行っている。つまりこの「白狗」は幼犬のことである。なお『儀禮』**鄉**飲酒禮、**鄉**射禮、燕禮にも「其牲為狗。」（その禮には狗を使用することになっている。）という記述がある。さらに『毛詩正義』豳風、七月にも「饗者，**鄉**人以狗，大夫加以羔羊。」とみえる。つまり**鄉**飲酒禮は、「**鄉**人」ならば狗を使用するが、「大夫」が参加すれば羔と羊をプラスするということになる。厳格な等級制度として知られる周禮に照らせば、これらの「狗」はすべて幼犬と考えたほうが妥当であろう。詳しくは拙著を参照されたい[56]。

実際それを裏付ける発掘資料も現れた。一九七〇年代に、中国湖南省長沙市の郊外にある馬王堆漢墓から、副葬品として埋葬された数多くの食べ物の名前を記す「竹簡」（文字を書く竹の札）が発掘された。「竹簡」には「狗酵羹」、「狗巾羹」、「狗苦羹」（いずれ

も狗肉の羹)、「狗肝炙」(仔犬のレバーの串焼き)、「狗炙」(仔犬の丸焼き)のような「狗」で記されたものがある一方、「犬脅炙」(犬のばら肉焼き)、「犬胾」(犬の肉の大きな切り身)および「犬肩」(犬の肩酌骨の部分の肉)のような「犬」で書き記されたものもある[57]。発掘された犬の骨を鑑定した結果、供え物に用いられた「狗」はすべて年齢が一歳以下で体重が四、五キロくらいの幼犬だと判明した[58]。

このように古代の儒教儀礼制度では区別が必要なときは犬と狗ははっきりと使い分けられていたのである。一方儀礼制度以外のところではむしろ両者が互に通用するケースが多い。

6.2　総称としての「狗」と「犬」

「狗」と「犬」は「年幼」または「大小」の区別はあるものの、実際それが意識されず「dog」の総称として混用されることが多数みられる。これについて唐の孔穎達は次のように述べている。

> 然通而言之，狗犬通名;若分而言之，則大者為犬，小者為狗。故『月令』皆為犬，而『周禮』有犬人職，無狗人職也。故『爾雅』云「未成毫，狗」是也。但燕禮亨狗或是小者或通語耳[59]。

段玉裁も『說文解字注』で「觀孔子言，犬卽狗矣。渾言之也。」と孔穎達と同じ考えを示した。

さらに『爾雅』の研究で知られる郝懿行も孔穎達の説をそのまま踏襲している。『爾雅義疏』に「狗犬通名。若對文則大者名犬、小者名狗。」とあるように、犬と狗はいずれも総称であるが、訓詁学のように意識的に両者の違いを強調すると、大きい者は犬で、小さい者は狗である。

『爾雅』釋獸に「尨，狗也。」とみえるが、これについても郝懿行は

> 上云「未成豪，狗。」此又以尨為狗，可知狗為通名。

と指摘している。

かれらの論を裏付ける資料はほかにもみられる。例えば、「尨」については『說文解字』卷十、犬部に「尨，犬之多毛者。从犬从彡。」とある一方、『爾雅』釋獸に「尨，狗也。」とみえるように、毛の多い「尨」を解説するさい「犬」と「狗」のどちらを使っても可能である。

なお「**獒**」に関しても、『爾雅』釋畜に「狗四尺為**獒**」とあるのに対し、孔安国の『尚書』旅獒の傳に「犬高四尺曰**獒**」とみえる。大犬でも「狗」を使っているわけである。実際前掲『說文解字』の「犬，狗之有縣蹏者也。」という説明でさえ「狗」はすでに仔

犬ではなく通称として使用されたわけである。なぜならば「犬, 狗之有縣蹏者也」の「犬」は、前述したように，最初は猟犬つまり成犬をさすものだったからである。有名な故事熟語「狡兔死、走狗烹」(『史記』越王勾踐世家のように「走狗」を用いるケースもあれば、「野禽殫、走犬烹」(『漢書』蒯伍江息夫傳』) のように「走犬」を用いることもある。また『文子』上德篇「乳犬之噬虎，伏雞之搏狸。」のような「乳犬」もあれば、『淮南子』說林訓「乳狗之噬虎也，伏雞之搏狸也。」のような「乳狗」もある。さらに漢代の罵倒語「老狗」(『漢武故事[60]』) の「狗」も明らかに幼犬の意味ではない。『禮記』曲禮「尊客之前不叱狗」の「狗」も幼犬でなく、犬の総称として用いられている。

このように儒教儀礼の根幹にかかわる部分でなければ，儒教儀礼制度を記録する代表的な書物、たとえば『儀禮』・『周禮』・『禮記』であっても，「狗」は「犬」と同様、大小の区別もなく、ただの総称として使われていた。上述のように上古時代一部の儒教儀礼を除けば，すでに「狗」は幼犬の意ではなく、「犬」と同様、成犬または通称名として交代使用されていたのである。

6.3 「犬子」・「狗子」・「小犬」・「小狗」・「大犬」・「大狗」

前述したように先秦両漢の時代「犬」と「狗」はほとんどの場合その大きさと関係なしに互いに dog の総称として使用されていた。一方幼犬・大犬をあらわす二音節の語彙も盛んに使用されている。

前漢、董仲舒の『春秋繁露』求雨に「其神玄冥，祭之以黑狗子六，玄酒，具清酒、膊脯。」とみえ、三国の呉の韋昭の注に「地中有聲如鳴耳，或曰如狗子聲[61]。」とあるように「狗子」は幼犬の意をあらわす二音節の語彙として登場している。また「犬子」という二音節の言葉もしばしばみられる。『史記』司馬相如傳に「司馬相如者…少時好讀書，學擊劍，故其親名之曰犬子。慕藺相如之為人，更名相如。」とあり、『說文解字』卷十の犬部に「猶，一曰隴西謂犬子爲猷。」と記されるように、「犬子」は幼犬の意のみならず、人名としても使われた。

「犬子」・「狗子」のほかに、「小犬」・「小狗」も多用されている。『說文解字』犬部に

> 獡，小犬吠。 从犬，敢聲。
>
> 獺，如小狗也。水居食魚。从犬，賴聲。

とある。

「小犬」、「小狗」はある一方、「大犬」、「大狗」も頻繁に顔を出している。『尚書』旅獒に「西旅獻獒。」とみえるが、漢の孔安国は「西戎遠國貢大犬。」と解説している[62]。それに対し『前漢紀』孝武皇帝紀第三や『漢書』五行志、そして同卷九十六の『西

域傳』にみえるのが「大狗」である。

このように先秦両漢の時代においてこれらの二音節の言葉の登場または多用は、犬と狗を区別することなく、互いに置き換えられて使用されていたこととは無関係ではなかろう。

7. 故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」について

7.1 この「狗」は「熊虎之子」ではなく、「犬」である。

上では「狗」と「**豹**」、そして「狗」と「犬」とのかかわりについて相当紙面を割いて論じてきた。では故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」は 一体「**豹**」なのか「犬」なのか、あるいは「狗子」なのか「熊子」なのか。

前に蔣超伯の意見を紹介したときにも触れたが、『後漢書』孔僖傳に照らせば、この「狗」は明らかに「**豹**」の借字ではなく、原意の犬のことである。孔僖傳にみえるのは「畫龍不成反為狗」であるが、『後漢書』馬援傳の「畫虎不成反類狗」とは「龍」と「虎」の違いで、故事熟語の意味は全く同じである。「畫虎不成反類狗」の「狗」を「虎子」と主張する人たちの根拠は、前述したように『爾雅』釋獸の「熊虎醜，其子狗」にある。つまり「虎」と「狗」は同じ文に同時に出ているから、「狗」を「虎子」と捉えるべきだという考えが根底にある。しかし同じ考えをもって「畫虎不成反類狗」の「狗」を解釈できても、「畫龍不成反為狗」の「狗」については解釈できなくなる。「龍」と「虎」とは全く関係のない異なる動物で、どうあろうとも「畫龍不成反為狗」の「狗」を「虎子」と捉えることはできない。結局原意の犬としてしか説明できないわけである。

なお言葉の文脈のみならず、これを証明する史料もある。前掲『後漢書』巻七十九の孔僖傳に

> 僖與崔篆孫**駰**復相友善，同游太學，習春秋。因讀**吳**王夫差時事、僖廢書嘆曰:「若是，所謂畫龍不成反為狗者。」**駰**曰：「然。昔孝武皇帝始為天子，年方十八，崇信聖道，師則先王，五六年間號勝文、景。及後恣自己、忘其前之為善。」僖曰：「書傳若此多矣！」鄰房生梁郁**儁**和之曰：「如此，武帝亦是狗邪？」僖、**駰**默然不對。郁怒恨之，陰上書告**駰**，僖誹謗先帝，刺譏當世。」

とある。孔僖と崔**駰**は共に太学で学ぶ友人であるが、ある日『春秋』を勉強し、呉王の夫差の物語を読んだとき、孔僖は呉王の夫差のことを「畫龍不成反為狗」と嘆いたら、崔**駰**も「そのとおりだ。漢の武帝も呉王の夫差と同じようなものだ」といった。二人の話を聞いていた隣部屋の梁郁という太学生が「そういうならば、武帝は犬になってしま

ったのではないか」と質した。孔僖と崔駰は黙ったままで答えなかった。怒った梁郁は、先帝を誹謗し当世を皮肉ったということで二人を密告した。

梁郁の話および孔僖、崔駰の反応からみると、明らかにこの「狗」は「虎子」ではなく、「犬」の意である。したがって恵棟らの「虎子」の説は成り立たない。

7.2　この「狗」は「佝着身子的小狗崽」ではない。

冒頭で紹介した4番の意見はこの「狗」を dog として認めているものの、「大犬」を意味する「犬」ではなく、「狗崽」を意味する「狗」というものである。それはきわめて牽強付会の説明だと思う。

前述したように先秦両漢の時代、「狗崽」をあらわす言葉、たとえば「犬子」、「狗子」、「小犬」、「小狗」など の二音節の語彙はすでに大量に使用され、「狗」はごく少数の儒教儀礼を除けば、「犬」と同様、「年幼大小」と関係なく dog の総称として使用され、定着した。これについて上ではすでに多くの実例を挙げて説明したので、これ以上述べない。

7.3 この「狗」は「熊之子」ではない

張、孫の二人はこの「狗」を「熊之子」と勘違いした最大な原因は、張凱の指摘したとおり、文の区切りを間違えたところにある[63]。すなわち二人は「熊虎醜，其子狗」ではなくて、「熊, 虎醜, 其子狗」と読み間違えたのである。なぜならば前掲後漢の李巡の『爾雅注』に「熊虎之類, 其子名狗。」とあるからである。また李学勤主編『十三經注疏・爾雅』標点本をはじめとする多くの書では「熊虎醜，其子狗」のように区切りをつけている。

ところが張、孫のような読み方をした者はほかにもいた。実は明の末、清の初の文人である屈大均もそのひとりである。

> 嶺之南，熊有三種，曰人熊，曰豬熊，曰狗熊。狗熊即『爾雅』所謂「熊，虎醜，其子狗」者也，郭璞謂熊之子名狗，非也。狗熊者，熊之小者也。以其小，故曰熊子也。璞又言：『律』曰：「捕虎一，購錢三千，其狗半之。」今嶺南捕得虎與狗熊，皆受上賞，以其食人之獸，而狗熊尤嗜小兒也[64]。

上述のように屈大均は郭璞の注を否定し，次のように読んだと考えられる。

> 熊，虎醜，其（熊）子，狗。

すなわち熊は虎の類に入り、「熊子」は熊の子ではなく、「狗熊」のことだということである。漢語語法からみると、相当な無理があるが，一つの見方として付しておく[65]。

また前掲尹桐楊の『爾雅義證』にも

> 熊獸似豕，山居冬蟄。…今食肉而兼植物獸也。…虎亦食肉類，因云虎醜。『周禮』

熊配虎為旗，又以爲射侯。

と記されるように、熊は虎の類に属すものだと述べている。

このように『爾雅』の「熊虎醜其子狗」については、従来「熊虎醜，其子，狗」という読み方と「熊，虎醜，其子，狗」という二通りの読み方があるのである。しかしいずれにせよ，それはあくまで「熊虎醜，其子狗」の「狗」に関する解釈であって、そのまま故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」にイコールすることは甚だ問題である。なぜならばこの故事熟語に「熊」はまったく出ていないにもかかわらず、「狗」を「犬」ではなく、「熊之子」と捉える思考の仕方は、あまりにも飛躍的すぎるからである。

以上故事熟語「畫虎不成反類狗」の「狗」について文字、音韻、歴史など様々な角度から考証を行ってきた。このような広範囲で長期にわたって意見の分かれる成語はあまり類を見ないだろう。要するに故事熟語のような古い出典のある熟語を正しく理解するには，言語学の資料だけでは不十分で、周辺の史料も積極的に活かすべきだ思う。紙面上の都合により本稿で取り上げられなかった課題もまだ残っているが、今後の研究にゆだねたい。

注

1　劉知幾『史通』

2　明、李玉『永团圓』一八折

3　清『施公案』一八八回

4　清、李綠园『歧路燈』第 11 回

5　宋、陳騤『文則』戊、清、李漁『閑情偶寄』變調第二

6　清、蒲松齡『聊齋志異』胭脂

7　北齋、顔之推『顔氏家訓』雜藝、『封神演義』第七十六回、清、陸時化『書畫說鈴』六

8　明、清溪道人『禅真逸史』一八

9　△孫占林「釋“畫虎不成反類狗”的“狗”」『紅河學院報』1990 年 1 期。また同じような内容のものを「“畫虎不成反類狗”趣談」という題目で 2010 年 4 月 8 日付の『温州日報』に再度出している。

△楊潤陸「語素義的誤解與失落」『語文建設』1995 年第 10 期

△張港「“狗”与“犬”之別」『172 个被誤讀的史實』広西人民出版社 2008 年

△張凱「此“狗”非彼“狗”也」『漢字文化』2003 年第 1 期。しかし張氏は 2010 年の論文「再論“畫虎不成反類狗”(畫虎類狗)—與張茂華、孫良明老師兼與自己

商榷」(『**时**代文学 (上)』2010 年第 4 期）で持論を否定し,“狗”を“犬”と改めた。

10　徐德明、吳平主**编**『清代学術筆記叢刊』学苑出版社、第五十五冊 339 頁、2005 年。なお『筆記小説大観』正編第 5 冊 2940 頁、台湾新興書局 1973 年）にもみえる。

11　張茂華、孫良明『中国語文』2005 年第 1 期

12　CCTV『百家講壇』2010 年 第 161 期『成語趣談』一：字有“出身”(2010 年 6 月 10 日）

13　△明、無名氏『鳴鳳記』五出「恐投鼠不着，誤傷其器；畫画虎不成，反類其狗。」(『中国俗語大辞典』四〇五頁、上海辞書出版社、2011 年）

△清、吳璿『飛龍全傳』 第七回：「况他手下人多，賢弟雖則勇猛，恐衆寡不**敌**，一時失手與他，反遭荼毒，豈非畫虎不成，反類其狗？賢弟只宜忍耐為妙，及早儿赶路罷。」(山西省社会科学院『古今俗語集成』第三巻所収、山西人民出版社 1989 年）

14　『經典釋文』巻三〇、『爾雅音義』下、一七一八頁（『叢書集成初編』所収、中華書局 1985 年）

15　馬国翰『玉函山房輯逸書』經編、爾雅類

16　司馬光『類篇』三四八頁、中華書局、1984 年

17　前掲『類篇』三六一頁

18　池田温「中国古代の猛獣対策法規」『律令制の諸問題』六一五頁、1984 年 5 月、汲古書院

19　王力主編『王力古漢語字典』六九二頁、中華書局 2002 年 12 月

20　台湾教育部『異體字字典』電子版、2004 年

21　同上

22　清、盧文弨『經典**释**文考証』爾雅音義、三八〇頁、(『叢書集成初編』所収、中華書局、1985 年）

23　嚴元照『爾雅匡名』(朱祖延主編『爾雅詁林》四三八九頁、湖北教育出版社、1996 年

24　長梅外編『古今異字叢』(杉本つとむ編『異体字研究資料』第六巻、四〇〇頁、雄山閣、1974 年 4 月

25　孔穎達『春秋左傳正義』巻四十四および『爾雅漢注』巻下に収録されている。

26　朱駿聲『說文通訓定聲自序》藝文印書館、一〇頁、1971 年

27　前掲朱駿聲『說文通訓定聲』三九二頁

28　王力『中国語言学史』山西人民出版社、1981 年

29　清、尹桐楊『爾雅義證』(朱祖延主編『爾雅詁林》四三八九頁、湖北教育出版社、1996 年

30 「江東」は「青州」の誤り。

31 清、王筠『說文句讀』第三冊、北京市中國書店

32 孫詒讓『籀**廣**述林』卷十『與王子壯論假借書』（丁福保『說文解字詁林』第一冊、二三三**页**所収）

33 前掲王力主編『王力古漢語字典』六九二頁

34 王力『同源字典』同源字論、商**务**印書館、2002 年

35 魏、李登『聲類』

36 『集訓』

37 慧琳『一切經音義』卷九十六、音弘明集卷六、中華電子佛典協會、2002 年『大正藏』（『大正新修大藏經』）No. 2128 所収・電子版

38 魏、**张**揖

39 張戩『考聲切韻』

40 前掲『一切經音義』卷六十六、阿毘達磨發智論卷十九

41 段玉裁『說文解字注』一八〇八頁

42 前掲孔穎達『春秋左傳正義』卷四十四および『爾雅漢注』卷下

43 山**东**省の大部分と河北省の**东**南部

44 前掲孫詒讓『籀**廣**述林』卷十

45 前掲『類篇』三六一頁

46 Jerry Norman Chinese. Cambridge University Press. New York

47 同上 Jerry Norman 1991 Chinese.

48 『三國志』吳書、妃嬪傳、權步夫人

49 前掲孔穎達『春秋左傳正義』卷四十四および『爾雅漢注』卷下。

50 胡奇光、方環海『爾雅注』前言、上海古籍出版社、1999 年

51 漢語大詞典編写組『漢語大詞典』漢律、漢語大詞典出版社、1991 年

52 『後漢書』宦者傳

53 楊伯峻『經書淺談』所収、中華書局、1984 年

54 湯可敬『說文解字今釋』中冊、岳麓書社、1997 年、一三四四頁

55 郝懿行『爾雅義疏』下七、第三冊、北京市中國書店

56 桂小蘭『古代中国の犬文化―食用と祭祀を中心に』第一章　大阪大学出版会、2005 年

57 関野雄、林巳奈夫訳『長沙馬王堆一号漢墓』平凡社、一九七八年、一八一 - 一八三頁

58　『長沙馬王堆一号漢墓出土動植物標本的研究』文物出版社、一九七八年、五〇頁

59　『禮記注疏』曲禮

60　『百部叢書集成』所収

61　漢、班固撰、唐、顔師古注『漢書』五行志

62　『尚書注疏』巻十三

63　前掲張**凱**「再論“畫虎不成反類狗”」

64　屈大均『廣東新語』**兽**語、中華書局 1985 年、五三五頁

65　清、沈廷芳『十三經注疏正字』爾雅にもほぼ同じ記述がみえるため、晩年広東にある粤秀**書**院で教鞭を執った経歴からみれば、沈は『廣東新語』から写したものと考えられる。